

書評 BOOK REVIEW

橋本和明〔著〕

子どもをうまく愛せない親たち

——発達障害のある親の子育て支援の現場から

新書判・朝日新聞出版〔朝日新書〕

2024年12月刊

定価990円（税込）

評者＝亀岡智美（兵庫県こころのケアセンター）



昨今激増する子ども虐待への対応の際に、子どもが被るトラウマ（心的外傷、こころのケガ）が目目され、子どものこころを守る視点からの介入がなされるようになってきたのは喜ばしいことだ。一方、発達特性を有する子どもや育てにくい子どもの子育てに悪戦苦闘する親に対して、「それはないでしょ」と言いたくなるような対応を目にすることが時々ある。

たとえば、指示に従わない、癪癪がひどいなど、子どもの行動に困り果てて相談に来た親に対して、「そう神経質にならずに」とか「しばらく様子を見ましょう」といった助言指導がなされ、そのまま放置されていた後、親が思い余って子どもを叩くようになると、「それは虐待だ」と糾弾するケース。相談したときには取り合ってもらえず、体罰を振るった途端に介入される親の気持ちはいかばかりかと思う。

本書は、そんなモヤモヤを吹き飛ばしてくれる内容であふれている。全9章からなる本書では、まず、発達障害を有する親が子育てに取り組む際の困難や、発達障害の子どもの被虐待リスクが高いこととその要因が、具体例とともにわかりやすく説明されている。その中で浮かび上がってくるのは、結果として虐待行為に至ったとしても、親なりに子育てにまつわるさまざまなニーズ（こんな子どもになってほしい）があり、子育てに取り組もうと奮闘している姿である。

中盤では、知的発達症、自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症など、発達障害の特性がコンパクトにまとめられている。また、発達障害が親子に現れる3つのパターン（親が発達障害、子どもと親が発達障害、子どもが発達障害）を想定し、「社会性の欠如」「コミュニケーション力の欠如」「柔軟性の欠如」「認知の欠如」

などの特性が、子育ての際にどのように影響し、どのような困難を招くのか、著者の豊富な経験をもとに解説されている。そのなかで、虐待に至ってしまう発達障害特有のメカニズムが明らかにされていく。

そして終盤では、子育ての多様性を認め、具体的な子育ての技術を伝授することこそが、親子を虐待から救うことになることと説かれている。いくつかの「ワンポイント・アドバイス」もわかりやすい。全編を通して著者は、「子育ては、愛情ではなく技術である」ということを伝えている。親としての倫理を解くことや、やみくもに愛情をかけることが、親子を救うことにはつながらない。「愛情をかけること」が意味するところも、人それぞれだからだ、と。

社会情勢の移り変わりとともに、子育ては以前にもまして困難な仕事になっている。本書が醸し出す親へのやさしい視点を、社会全体で共有する必要性を感じるとともに、本書が、多くの子育てに悩む親とその支援者に届くことを切に祈りたい。